

# テムズ川流域におけるアルカディア風景の創造

——18世紀初期のパラディアン・ヴィラ建設を通して——

芝 奈 穂

キーワード：アルカディア風景、18世紀、ヴィラ、テムズ川

## はじめに

イギリスの首都ロンドンにおいて、テムズ川南西部沿い、とりわけハンプトン (Hampton) からトゥイッケナム (Twickenham)、ピーターシャム (Petersham)、リッチモンド (Richmond) を経てキュー (Kew) までの優美な風景についてはよく知られている。蛇行するテムズ川に沿って、貴族の館であるカントリーハウスやヴィラが点在し、それに付随する庭園や牧草地が景観に彩りを添える。しばしばアルカディア風景 (Arcadian landscape) と称され、牧歌的な楽園にたとえられるその光景は、18～19世紀を通じて成立したと言及される。その最も象徴的な地点は、リッチモンド・ヒル (Richmond Hill) から眼下に広がる景観であるが、これは、1902年に法律により保護されることが決定した最初の眺望であり、18～19世紀にかけての眺めがほとんど変わらぬまま今に至る<sup>1)</sup>。それは、リッチモンド・ヒルの当時の風景画と現在を比較すれば一目瞭然である (図1・上下)<sup>2)</sup>。1994年、テムズ川沿いの景観保護を目的として地方行政計画大臣 (The Minister for Local Government and Planning) によって設置されたテムズ・ランドスケープ・ストラテジー (The Thames Landscape Strategy) が、この地域の風景がいかに形成され、発展してきたかについて報告書をまとめた。当該報告書では、この地域のランドスケープを地理的かつ歴史的に探究し、その優位性を著述している<sup>3)</sup>。さらに、歴史的建造物保護を目的とする公共機関ヒストリック・イングランド (Historic England) によるこの地域のカントリーハウスや庭園の研究調査および復興工事も進んでおり、これらの地域の景観への理解が進むとともに、その重要性が広く認識されるに至った<sup>4)</sup>。本稿では、これら最新の研究に触れながら、いかにして、テムズ川沿いのアルカディア風景が成立したのかを、18世紀初期に建設された複数のヴィラの分析を通して考察することを目的とする。このためには、まずテムズ川沿いのヴィラという概念がいつ創出され、どのように完成したのかを追究する必要がある。

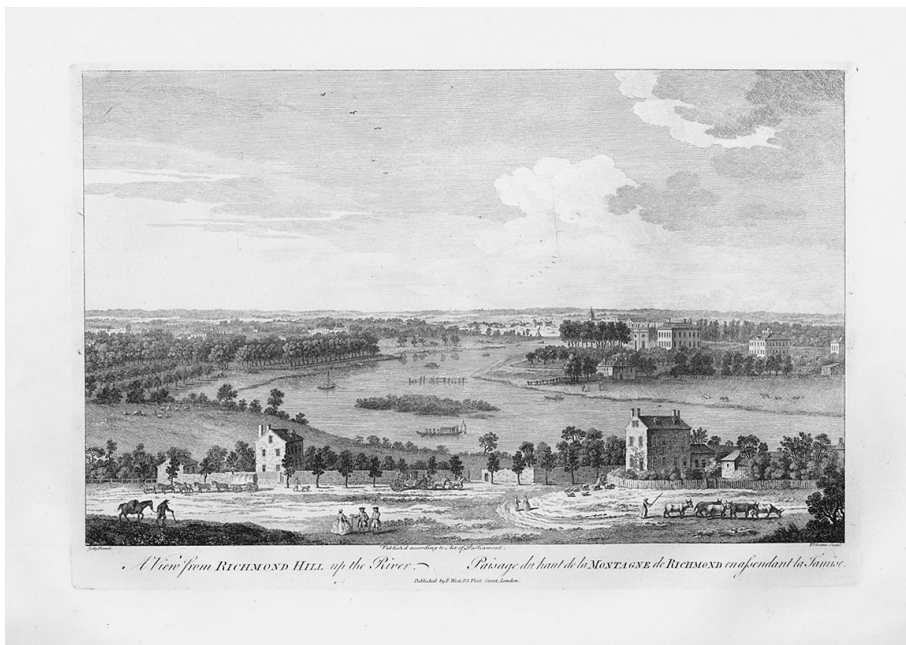


図1 Richmond Hill の現在（上）と 1749年当時（下）

[出典：写真は筆者撮影。下図は、A View from Richmond Hill up the River, 1749, © The Trustees of the British Museum. Shared under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International (CC BY-NC-SA 4.0) license.]

ヴィラとは、もともと古代ローマの近郊で、貴族のために建てられた別荘にその起源を認め得るが、ルネサンス期に建築家アンドレア・パラディオ（Andrea Palladio, 1508–1580）等により、その復興が図られた。同運動はヨーロッパ中に流行し、イギリスにももたらされ、とりわけ18世紀はパラディアニズムによるヴィラ（Palladian villa）の流行を見た<sup>5)</sup>。ヴィラはもともとカントリーハウスの一形式であるが、イギリスにもたらされると、広大な敷地を持つカントリーハウスに対して、コンパクトな邸宅およびその周囲に配置された庭園を指すようになった<sup>6)</sup>。テムズ川南西流域は、古くから王侯貴族やロンドン主教等の宮殿が置かれてきたことから明らかなように、その水上交通の利便性から最も好まれた地域であった。ハンプトンコート、リッチモンドおよびキューには、様々な時代を通じて王宮が置かれたが、王室を惹きつけたこれらの地域は、貴族たちもエステートを構える場所であった<sup>7)</sup>。16～17世紀には、有名なサイオン・ハウス（Syon House）やハム・ハウス（Ham House）、ヨーク・ハウス（York House）等が建設された。18世紀になると、貴族やブルジョワ階級がこの流域にヴィラを建設し始めるようになり、初期のパラディアン・ヴィラの発展を促した。

18世紀におけるこの地域のアルカディア風景の成立にとりわけ重要であったのは、王宮や伝統的なカントリーハウスと言うよりも、これらヴィラが存在であったとする方が適切である。その理由として、この地域のカントリーハウスは、概ね16～17世紀頃に建設されているのに対して、ヴィラは18世紀以降の建設であり、著名なジャーナリストや哲学者、知識人たちによるテムズ川沿いの風景に関する同時期の論考と並行して、ヴィラが果たした役割が一際大きかったということが考えられる。第2の理由として、パラディアン・ヴィラは“classical retreat”を体現するものであり<sup>8)</sup>、それが、この流域のアルカディア風景の概念的基盤を形成している点も挙げられるであろう。ウェルギリウス（Virgil）やホラティウス（Horace）等の古典作品中に出てくる古代の retreat の考え方がパラディオによるヴィラの本質的な要素であり、テムズ川流域に18世紀初期に建設されたパラディアン・ヴィラにもこの classical retreat の考え方が色濃く投影されているのである。

本稿では、ハンプトン・コートからキューまでのテムズ川南西部沿いに18世紀前半に建てられたパラディアン・ヴィラのうち、第2節で取り上げるように、1841～5年に作成された有名なジョン・ロック（John Rocque）のロンドン周辺地図に描写され、さらに、その立面図等が当時、建築雑誌に掲載されたものを考察の対象とする。それらは主に1720年前後の10年間に集中しており、サドブルック・ハウス（Sudbrook House）、詩人アレキサンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688–1744）のヴィラ（Pope's Villa）、マーブル・ヒル・ハウス（Marble Hill House）、リッチモンド・ロッジ（Richmond Lodge）等である。これらには、ポープのヴィラ等非常に有名なヴィラも含まれるが、本稿では、これまで十分には研究されてこなかったサドブルック・ハウス等にも言及

し、「古典主義的ヴィラ」に表される価値観という枠組みを適用することによって、18世紀ロンドン郊外の牧歌的風景創造の要として、ヴィラが果たした役割をより広範囲に検討することとしたい。また、これまでの研究の多くは、ヴィラとその庭園を分けて分析したものが多く見られたが、アルカディア風景創出というテーマにおいては、ヴィラと庭園両者によって生まれる景観が重要であるため、本稿では双方が造り出すランドスケープに着目する。なお、18世紀の庭園史においては、この時代に整形式庭園から風景式庭園への移行があったとされるが、このパラディアン・ヴィラの庭園、いわゆるイングリッシュ・ガーデン (English Garden) と呼ばれるものが、整形式と風景式との間においてどのような位置にあるのかも併せて検証することとする。

## 1. アルカディアについての先行研究

アルカディアのテーマを扱った研究は数多く存在する。とりわけ庭園史においては、たとえば、May Woods の *Visions of Arcadia: European Gardens from Renaissance to Rococo* のように、美しい風景を伴った庭園をアルカディアの極みとみなし、その様式の移り変わりを追ったものが見受けられる<sup>9)</sup>。また、イギリスにおいては、庭園はカントリーハウスに付随するものが多く、Gervase Jackson-Stops による *An English Arcadia: Designs for Gardens and Garden Buildings in the Care of National Trust, 1600–1990* 等の研究は、その変遷を探究している<sup>10)</sup>。Adam Nicolson の研究は、1520–1650年にわたるペンブルック伯爵家 (Earls of Pembroke) の3世代に焦点を当て、16～17世紀のイギリスにおけるアルカディアの成立がそのカントリーハウスや彼らの生活にどのように表象されているかを分析しており、貴重なケーススタディとなっている<sup>11)</sup>。しかし、これら庭園やカントリーハウスをテーマとした研究では、アルカディア風景の定義が概して明瞭ではなく、牧歌的情景というだけで一括りにしているのが難点である。

これらの研究に対して、Allan R. Ruff による *Arcadian Visions: Pastoral Influences on Poetry, Painting and the Design of Landscape* は古代ギリシアのアルカディア地方での羊飼いの生活にまで遡るアルカディアの起源から、ウェルギリウスやホラティウス等の詩に見られる古代ローマのヴィラにおける田園生活の理想、ルネサンス期の田園風景を経由して、18世紀イギリスでのアルカディアの成立、さらに、その後のアルカディアの発展を20世紀にわたるまで記述しており、本稿のテーマである18世紀のテムズ川を中心としたアルカディア創造が、ヨーロッパにおける古代から近世までのアルカディアの歴史にどのように位置付けられるかについて重要な観点を提供してくれる。しかし、肝心の18世紀のテムズ川風景をアルカディアとする根拠についての分析は必ずしも十分ではない<sup>12)</sup>。

一方、Tim Richardson による *The Arcadian Friends: Inventing the English Landscape Garden* は、18世紀におけるアルカディア・ランドスケープの展開というトピックを扱ってお



り、本稿のテーマにとって必須文献となる<sup>13)</sup>。しかし、その分析は18世紀イギリスにおけるアルカディア風景の創造の全体像に及んでおり、その焦点が本稿にとっては若干広すぎるきらいがある。

18世紀のテムズ川南西部をアルカディアとする根拠を的確に示している研究としては、前述の The Thames Landscape Strategy の報告を基にまとめられた研究である Mavis Batey および David Lambert らによる *Arcadian Thames: The River Landscape form Hampton to Kew*<sup>14)</sup>、さらに Batey 単独による “The Pleasures of the Imagination: Joseph Addison’s Influence on Early Landscape Gardens” が挙げられる<sup>15)</sup>。前者は、18世紀前半だけでなく、18世紀全体の考察を含んでおり、また、研究対象がテムズ川沿いのカントリーハウスや牧草地も含めて多岐にわたっている。とりわけ、ジョセフ・アディソン (Joseph Addison, 1672–1719)、ポープ、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660–1731)、J. M. W. ターナー (J. M. W. Turner, 1775–1851) 等の文人および芸術家たちを含め、18世紀を通じてこの地に居住し、テムズ川の景観を描写した芸術家たちの作品に依拠しながら、これらの地域が18世紀の初めにはすでに「集合的風景」(collective landscape) を形成していたことを論じている点が重要である<sup>16)</sup>。後者も、筆者 Batey の主眼が、アディソンによる ‘the pleasures of the imagination’ についての概念の考察を通して、それがいかに18世紀初期の庭園様式に影響を与えたかを明確にすることに置かれてはいるものの、その論点には、アディソンの理論が広範囲に影響を与え、テムズ川流域のアルカディア風景の形成にも大きく寄与したことにも触れている点が秀逸である。本稿では、これら2つの研究の視座に立ち、1720年代前後に建設され始めたパラディアン・ヴィラに焦点を絞ることによって、それらが18世紀前半におけるこれらの地域のアルカディア風景の創造にどのように作用したかの分析を付け加えることとしたい。

## 2. ロックの地図に描写された18世紀前半のテムズ川沿いの風景

テムズ川南西部が、いかに王侯貴族のエステートやカントリーハウスの好立地として目されていたかは、前述の1741～5年にロックにより作成されたロンドンおよびその近郊の地図（図2）からも明らかである<sup>17)</sup>。測量技師として有名であったロックによる当該地図は、全16枚からなる大地図であり、ちょうど現在のグレーター・ロンドンと概ね一致する。ほぼ西から東へ横断するテムズ川を中心にロンドン近郊の村や街、道路、緑地、共有地等が描かれているだけでなく、幾多の貴族のエステートおよび庭園が詳細に描き込まれている。John Harris は、当該地図を1786年に作成されたジョン・ケアリー (John Cary) による地図と比較しながら、ロンドンにおける緑地の著しい変化に着目している。すなわち、両者の地図の間に、イギリスの庭園史上、最も重要なイングリッシュ・ガーデンの隆盛があり、整形式庭園から風景式庭園への移り変わりが克明に描写されていると論述している<sup>18)</sup>。



図2 Rocque's Map (1741~5)

[出典：John Rocque, *An Exact Survey of the City's of London, Westminster, Maps Crace Port.* 19.19. (1.), © British Library Board. なお、地図上の①～④は筆者による加筆]

彼の研究に沿って、当該地図をテムズ川南西部流域のヴィラとその庭園のガイドとして概観するならば、以下のとおりになる。南西部の王室が誇るハンプトン・コートとその整形式のバロック庭園から出発し、テムズ川を下ると、トウイッケナムに到達するが、ここには多くの貴族たちのエステートとその庭園が見受けられる。本稿で取り上げるポープの庭園（図2に加筆の②）やマーブル・ヒル・ハウス（図2の③）もある。その対岸はピーターシャムでサドブルック・ハウス（図2の①）がある。さらに下るとリッチモンドに出るが、冒頭で述べたリッチモンド・ヒルを通り過ぎると、現在のオールド・ディア・パーク（Old Deer Park）が目前に広がる。そこはキュー植物園（Kew Gardens）と接しており、かつてここには王室の宮殿リッチモンド・ロッジ（図2の④）があった。16枚からなるロックの地図のこの1枚の中に、すなわち、この南西部にいくかにパラディアン・ヴィラが密集していたかを物語るものである。

### 3. 18世紀前半のテムズ川沿いのヴィラ

#### 3.1. Sudbrook House

テムズ川沿いに建設されたパラディアン・ヴィラのうち、これまで十分に研究されていないものの一つにサドブルック・ハウスがある。1714年、ピーターシャムのこの区画を第2代アーガイル公爵（The 2nd Duke of Argyll, 1680–1743）が王室からリースし、建築家ジェームズ・ギブス（James Gibbs, 1682–1754）にヴィラ建設を依頼した。1715～9年にかけて建設された当該ヴィラの立面図と平面図（図3）は、ギブス自身が1728年に出版した *A Book of Architecture* に掲載されている<sup>19)</sup>。ヴィラは2階建てで地下は家事室となっている。ヴィラの中心には2階部分吹き抜けの30フィート（およそ9.14メートル）からなる立方体のキューブルーム（a cube-room）が1部屋あり、正面からも背面からもアクセスができ、おそらく社交のための大広間として使われたのであろう。この中心のキューブルームの両側には、それぞれ、控えの間、ベッドルーム、2つの小部

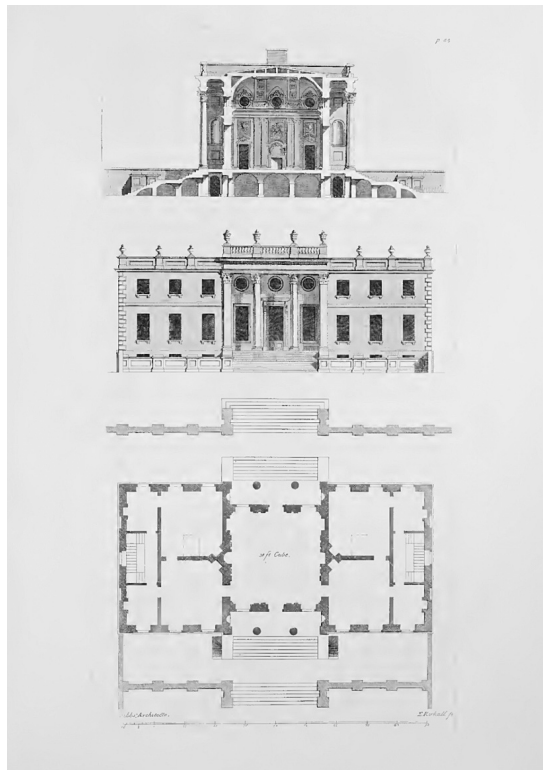


図3 Sudbrook House (1715～9)

[出典：James Gibbs, *A Book of Architecture, Containing Designs of Buildings and Ornaments* (London, 1728) plate 40. The Getty Research Institute, L.A.]



屋、階段からなる居室 (apartments) がシンメトリーに配置されている。階段は上階と地下室へとつながるが、上階には4つのゲスト用寝室 (lodging rooms) がある。19世紀にウィングが増築されるまでは、比較的コンパクトなヴィラであり、シンメトリーを伴った典型的なパラディアン・ヴィラの特徴を持つものであった。

しかし、それ以上に目を惹くのはその庭園である。庭園の設計図等が残っていないが、前述のロックのマップでは、邸宅を取り囲むようにプレジャー・グラウンド (pleasure ground) がレイアウトされ、その西側から敷地の中央寄りにかけて、ウィルダネス (wilderness) が広がり、邸宅の北西部には放射状に伸びたニレの木とライムの木からなる7つのアベニュー (avenues) がある<sup>20)</sup>。さらに、このアベニューとヴィラの間には、四方を壁で囲まれたオランダ庭園もある。プレジャー・グラウンドとは邸宅の周囲に設置された樹木や花で美化された区画を指し、ウィルダネスはもともと果樹園 (orchard) だったものが、17世紀最初にウィルダネスとして人気を博すようになったものである<sup>21)</sup>。アベニューは当該ヴィラの敷地のように放射線状のこともあれば、西側に隣接するハム・ハウスの敷地に見られるように直線のこともあるが、いずれもその幾何学的デザインを強調するものであった。ロックの地図に描写されたこれらの要素の全て

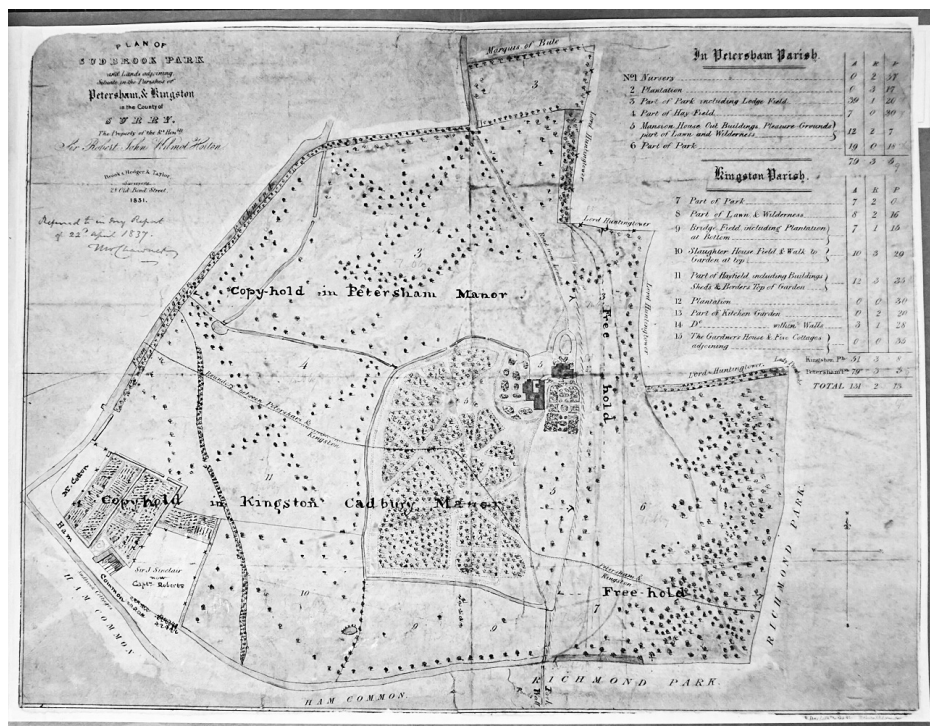


図4 Sudbrook House の敷地 (1831)

[出典: “Plan of Sudbrook Park in Petersham and Kingston,” 1831, The National Archives, MPE 1/982.]



が、16～17世紀はじめにヨーロッパで流行し、イギリスでも多くのカントリーハウスの庭園に採用された整形式庭園の特徴を表すものである。

邸宅および敷地はアーガイル公爵が没した後、その娘に受け継がれ、その後、所有者は次々に代わったが、19世紀半ばに王室に所有権が戻され、現在はリッチモンド・ゴルフ・クラブ（Richmond Golf Club）が所有している。興味深いことに、ロックの地図に記された庭園のレイアウトは、1831年の当該ヴィラの区画を描いた地図（図4）においても、その多くがそのまま残されている<sup>22)</sup>。オランダ庭園は姿を消したが、プレジャー・グラウンドやウィルダネス、アベニューは19世紀の前半においても健在であった。18世紀半ばの風景式庭園の隆盛にもかかわらず、また、所有者が頻繁に代わりながらも、当該ヴィラは整形式庭園を1世紀間保持し続けたことは特筆に値する。現在においてですら、芝地と樹木からなるゴルフコースの中にかつてのウィルダネスやアベニュー、マウントの跡を見出すことができる<sup>23)</sup>。

### 3.2. Pope's Villa

引き続き取り上げるヴィラは、全て同時代に建設されたものであるが、その哲学的理論においてもデザインにおいても、サドブルック・ハウスからの発展を見ることができる。その最初のものが、ポープが1719年、上流階級の郊外として人気のあったトゥイッケナムに築いたヴィラである。ポープのヴィラは古代ローマのヴィラのあり方を模倣したものであった。ホラティウスやウェルギリウスの詩では、田舎の農夫たちの牧歌的な生活が歌われているが、それら古典文学に影響を受けたポープはテムズ川沿いの牧草地にそのような景色を重ね合わせ<sup>24)</sup>、そこでの *retreat* を希求したのである。Batey らによる *Arcadian Thames* が述べるように、彼は古代の詩人を単に模倣するのではなく、18世紀当時のコンテクストにおいて古典主義的理想を追求しようとしたと言える<sup>25)</sup>。ポープは18世紀初頭のテムズ川沿いの牧歌的な景観において、古代ローマ人たちが建設したように *retreat* のためのヴィラを築き、彼らが提唱したデザイン理論を真似て庭園を造り、彼らがヴィラで行ったように、熟考と思索、すなわち、古典の翻訳と詩作を行ったのである。

田園生活を目指した *rural retreat* の前提となるヴィラとその周囲の風景に対して、ポープが意識的に古典主義の原則を取り入れようとしたのは当然のことである。1713年、彼は古典主義の「自然」の考え方について以下のように述べている。

There is certainly something in the amiable Simplicity of unadorned Nature that spreads over the Mind a more noble sort of Tranquility, and a loftier Sensation of Pleasure, than can be raised from the nicer Scenes of Art. This was the Taste of the Ancients in their Gardens, as we may discover from the Descriptions extant of them.<sup>26)</sup>

ポープの説く「飾られていない自然の心地よい単純さ」は、前述のアディソンが“the pleasures of the imagination”の源となる自然について述べたものとほぼ同義の考え方であ



図5 Pope's villa (18世紀後半)

[出典：A View of the Celebrated Mr. Pope's House, 1762-1793 (c.), © The Trustees of the British Museum. Shared under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International (CC BY-NC-SA 4.0) license.]

るが、彼はそれが古典主義の庭園の趣味であるとしているのである。

ポープはヴィラと庭園を含めた風景造りに古典的ヴィジョンを取り入れることに余念がなかった。彼はもとあった建物をサドルック・ハウスも手がけたギブスに依頼してパラディアン風に造り替えさせた(図5)<sup>27)</sup>。中心部分は3階建てで、地下室があり、両サイドのウィングは2階建てとなっている<sup>28)</sup>。しかし、その古典主義的要素が顕著に現されているのが、その庭園においてであろう。ポープの死後、ジョン・サール(John Serle)によって行われた1745年の実測図<sup>29)</sup>やロックの地図における当該部分の詳細な描写(図6)から、それらを読み取ることができる。それらの資料から、ポープの庭園には楕円形のボーリング・グリーン(bowling green)やマウント(mounts)、グロット(grottoes)等の古典主義的モチーフが随所に盛り込まれていることがわかる。楕円形のボーリング・グリーンは円形競技場



図6 Pope's Garden depicted on Rocque's map (部分)

（amphitheater）を彷彿させるものである。一方、グロットはヴィラとその背面にある庭園をつなぐ形で地下に造られ、ポープの敷地で唯一現存しているものであるが、これも古代ローマのヴィラにはよく見られたものであった<sup>30)</sup>。これらの要素が小さな区画に所狭しと配置されている。

前述のとおり、18世紀初期は、より自然式庭園を志向したイングリッシュ・ガーデンの時代であり、彼の庭園はその走りと言われてきた。しかし、これらの図面からも明らかなおとおり、ポープの庭園は不規則なレイアウトというよりも、軸線の通った整形式庭園の特徴が顕著である。彼はその形式の庭園の一つの特色である樹木を様々な形に刈り込むトピアリーには嫌悪感を示したが、直線や軸線については反対しておらず<sup>31)</sup>、彼の庭園には中央に通路が走っているが、その軸上に庭園の入り口から反対側に向かって、貝殻神殿（the shell temple）から大マウント、林、ボーリング・グリーン、2つの小マウントおよびオベリスクが置かれており、その部分は左右対象に近いデザインである。その基本的には整形式のプランにおいて、不規則な要素と言えば、庭園の端にレイアウトされた入り組んだ園路で構成されたウィルダネスの樹林の存在である。前述のとおり、ウィルダネスは本来は整形式庭園のデザインであるが、ここでは、入り組んだ園路により不規則性を醸し出している。18世紀前半のポープの時代は、前述のサドブルック・ハウスの例が端的に示すように、17世紀の整形式庭園の影響をまだ色濃く受けていた時代であり、ポープはそこに「飾られていない自然の心地よい単純さ」を取り入れた点でイングリッシュ・ガーデンの先駆者となったと言える。

ポープの言う「飾られていない自然の心地よい単純さ」とは、古典の庭園に見られる単純さのことであり、Batey らが述べるように、世紀半ばの風景式庭園とは異なるものである<sup>32)</sup>。すなわち、ポープの庭園に見られる自然式庭園は、18世紀半ばにイギリス中を席卷したランスロット・ケイパビリティ・ブラウン（Lancelot Capability Brown, 1716–1783）によるなだらかな丘と広がる芝地、ところどころに置かれた樹木の塊に代表される風景式庭園<sup>33)</sup>とは区別して考えるべきである。基本的には整形式庭園に、マウントやグロット等の古典主義的イメージを取り入れたデザインがポープの庭園の真髄であった。その根底にあるのは、古代ローマの理想への哲学的追究であり、それが18世紀前半のイングリッシュ・ガーデンの特徴を形作ったとも言える。

重要なポイントは、テムズ川に面して建設されたヴィラとそれに合致するような古代ローマの要素を伴った庭園の両者が醸し出す情景がアルカディア風景であった点である。ポープのヴィラおよび庭園はこの地域の最も要となるランドスケープの一つとなり、同時代のこの地域のパラディアン・ヴィラとその景観形成に大きな影響を与えることになったのである<sup>34)</sup>。

### 3.3. Marble Hill House

類似の風景コンセプトは同じトウイッケナムにあるマーブル・ヒル・ハウスでも見受

けられる。このヴィラは、ジョージ2世の愛人であったヘンリエッタ・ハワード (Henrietta Howard, Countess of Suffolk, 1689-1767) が宮廷から退いた後、ジョージ2世から授けられた資金でトゥイッケナムに購入した敷地に1724~7年頃、彼女自身が建設したヴィラである。実際に建築を請け負ったのは建築家ロジャー・モリス (Roger Morris, 1695-1749) で、庭園造りにはポープと宮廷建築家であるチャールズ・ブリッジマン (Charles Bridgeman, 1690-1738) の二人が参画している。彼女はジョージ2世とのつながりばかりでなく、宮廷の主要人物であり、前述の近隣の貴族、第2代アーガイル公爵、さらに、ポープやジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) らとも交流があり、このヴィラは文化的サロンとしての地位を占めた。彼女の取り巻きの多くが、直接的であれ間接的であれ、風景造りに関与したのである。

当該ヴィラが客人を迎えての社交の空間を提供したことは、その平面図からも明らかである。コーレン・キャンベル (Colen Campbell, 1676-1729) の *Vitruvius Britannicus* に掲載されている当時のヴィラの平面図は、パラディアン風左右対称の建築様式を示しており、1階の主要部分はホール、その真上にある2階の主要部分はグレートルーム (Great Room) となっており、3階まで吹き抜けになっている。これらの部屋はテムズ川を見渡せる側に面しており、客人をもてなすのに適している。1階部分は他に朝食の間とダイニングの間、書斎があり、これらも社交にも使用できる二次的空間と捉えることができる。プライベート空間は、2階部分のハワードの寝室と化粧室等、および3階のギャラリーやグリーンルームに限られ、さらに、サービスエリアは1階にある家政婦の部屋以外は存在せず、それ以外の召使いの空間やキッチン等は、離れに置かれた<sup>35)</sup>。

しかし、ポープのヴィラ同様、当該ヴィラにおいても、古典主義的な要素はヴィラの機能や建築のあり方に表されているだけでなく、景観全体にわたって追求されている。当該ヴィラを描いたアウグストゥス・ヘッケル (Augustus Heckel, 1690-1770) による風景画 (図7) によれば、テムズ川を見下ろす形でヴィラが立っており、邸宅のすぐ目の前に楕円形の芝地 (oval lawn) があり、そこから段々状にテムズ川まで下っていく芝生の長いテラス (terrace) が置かれ、その両側にはテラスを縁取るように樹木が規則正しく植えられ、その林の外側には牧草地が広がっている様が描かれている<sup>36)</sup>。この風景画と当該領地の現況図 (c. 1749)<sup>37)</sup>を比較検討した Emily Parker によれば、この庭園にもポープの庭園と同様、古代ローマのエンブレムがあちこちに盛り込まれている<sup>38)</sup>。テラスは長方形ではなく、ヴィラに近い部分が馬蹄形になっており、Batey は古代ローマの庭園によく見られた競技場 (hippodrome) を表していると説明している<sup>39)</sup>。さらに、両端の林の中には、フラワー・ガーデンやグロット、ボール遊び場である九柱戯 (Ninepin Alley) 等があることから、古典主義のデザインに則っていることがわかる。

また、全体的な風景デザインにおいても、ポープの庭園との類似点が見受けられる。ポープの庭園が中心軸を持った基本的には整形式庭園に不規則な要素を付け加えたもの





図7 Marble Hill House (1749)

[出典：A View of the Countess of Suffolk's House near Twickenham, 1749, © The Trustees of the British Museum. Shared under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International (CC BY-NC-SA 4.0) license.]

であったのと同様、この庭園もヴィラからテムズ川に向けての楕円形の芝生と馬蹄形のテラスが中心軸に沿ってレイアウトされており、その両端にある林、その奥にある牧草地までシンメトリーを構成している。しかし、林の中にレイアウトされたグロットやフラワーガーデン、マウント、そして、入り組んだ園路で構成されているウィルダネス等是不規則な「自然」の要素を表している<sup>40)</sup>。とは言え、全体的な印象はポープの庭園と比べて、より田園的な風景を醸し出しているのも事実であろう。その理由の一つとして面積の違いが挙げられるかもしれない。ポープの敷地は約5エーカーと見積もられているのに対し、当該ヴィラの敷地は65エーカーもあり、10倍以上の規模の差がある。しかし、もっと根本的な理由は、当該ヴィラの庭園はポープだけでなく、ブリッジマンも関与していたことにありと思われる。彼は、後述するウィリアム・ケント (William Kent, 1685-1748) と並んで18世紀初期のイングリッシュ・ガーデンの基礎を築いた人物であった。Parkerも指摘するように、彼は基本的な古典主義的デザイン原理をポープと共有していたが<sup>41)</sup>、ポープがより哲学的であったの対し、彼は庭園デザイナーの立場からより牧歌的な風景を志向したと言える。

いずれにせよ、当該ヴィラの景観は、多くの知識とインスピレーションの集大成であり、古典的ランドスケープ (antique landscape) に裏打ちされたものであった。ヴィラ

からテムズ川を見下ろすことのできるなだらかな傾斜をもつテラスの存在は、当該ヴィラの景観的優位性を物語るものであり、逆に、テムズ川を通行して行く者はだれでもテラスの上に鎮座するヴィラ的美観を共有することができた。Hugh Prince は周囲の景観を「エレガントな田園」と評し、David Solkin は当該ヴィラは、「偉大なパラディオ自身と古代ローマの建築的遺産との両方との密接なつながり」を保持していると結論づける<sup>42)</sup>。このヴィラの景観の基礎となる古代ローマと古典への憧憬が現れたエンブレムこそが、イングリッシュ・ガーデンの源となったとしても不思議ではない。

### 3.4. Richmond Lodge

テムズ川が下って行く過程でトウイッケナムの次に通過するのがリッチモンドである。リッチモンドは中世の頃から王室の宮殿や狩猟場がたびたび置かれた場所であり、現在もオールド・ディア・パークとキュー植物園の周辺に王室領地の名残りを見出すことができる。ここにかつて存在していたリッチモンド・ロッジは18世紀の終わりに取り壊されるまで、王室の宮殿もしくはロッジとして使用された。これを「ヴィラ」と呼び得るか否かについては疑問なしとしないが、ジョージ2世が皇太子であった時の別邸であり、ヴィラとしての側面を持っていたことは肯認できる。皇太子は父ジョージ1世と仲違いし、1718年から夫妻でこの別荘に住み始め、1727年、1世の死去とともにジョージ2世として即位した後も、ロッジまたはヴィラとして用いた。また、コンパクトではないものの、パラディアン様式であった(図8)<sup>43)</sup>。この邸宅の絵がいくつか残っているが、どれも牧歌的な風貌を湛えている。特に、テムズ川から邸宅を描いたものは、この邸宅がテムズ川沿いのこの地域的美観に花を添えていたことを如実に示している。

しかし、これまでとりあげてきたヴィラ同様、アルカディア風景を醸成していたのは、当該ヴィラだけではなく、その広大なパークランドにもあった。1741～5年のロックによるマップおよび同じくロックによるリッチモンド・ロッジ周辺を描いた1754年のマップ(図9)<sup>44)</sup>では、邸宅の周囲には整形式の花壇(Flower Border)やキッチン・グリーン(Kitchen Green)があり、邸宅からテムズ川に向かっては直線の運河、テムズ川畔には神殿の立つマウントが見受けられる。テムズ川に沿ってテラスも築かれている。さらに、運河の区画の北東側には曲がりくねった園路とともにウィルダネスが広がっているのも見える。その北には長方形の鴨の池(duck's pond)と図書室として使用されたマーリンの洞窟(Merlin's Cave)が置かれ、そのさらに北側は、巨大な楕円形の草地や対角線の走るウィルダネス、円形競技場、そして、グロットの機能を持つ庵(Hermitage)等がレイアウトされた区画となっている。それ以外の、特に南東部は整然と区分けされた牧草地が連続している。1754年のマップでは、右上にMerlin's CaveとHermitageが上下に並べて描かれている。

ロックの両方の地図に詳細に描き込まれた庭園は、John Cloakeによれば、1730年代



図8 Richmond Lodge（18世紀）

[出典：A View of Richmond Palace, from the Walled Garden, Crace 1878 (XXXVI.60), © The Trustees of the British Museum. Shared under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International (CC BY-NC-SA 4.0) license.]

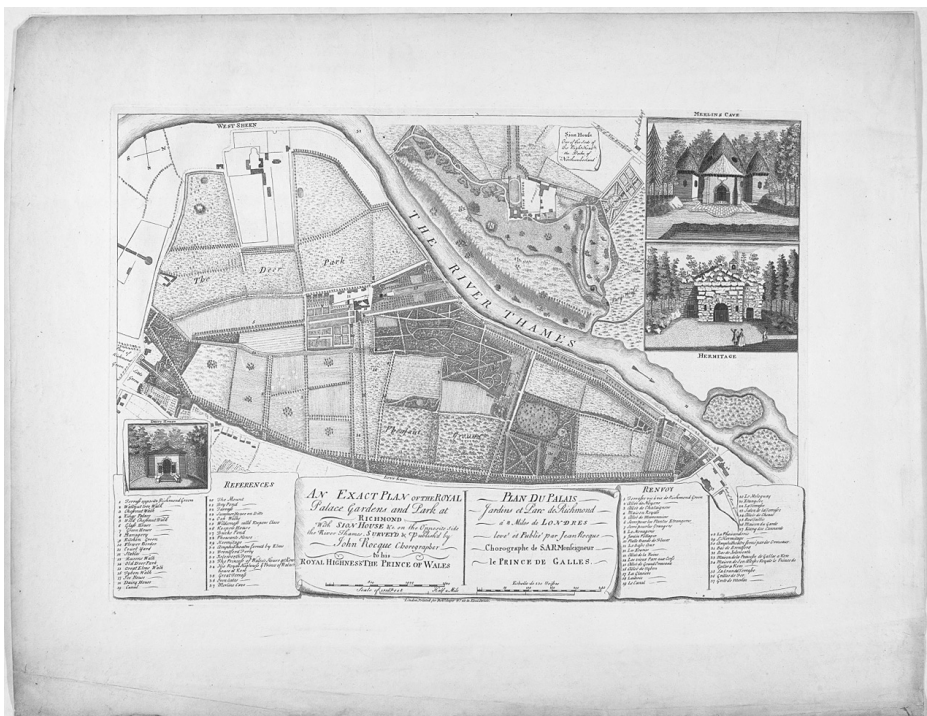


図9 Richmond Lodge の風景（1754）

[出典：John Rocque, An Exact Plan of the Royal Palace Gardens and Park at Richmond, 1754, Yale Center for British Art, Paul Mellon Collection.]

に建設された Merlin's Cave と Hermitage を除き、ジョージ 2 世が即位した 1727 年頃にはすでに原型が構想されていた<sup>45)</sup>。イギリス国立公文書館に所蔵されている政府によって作成された当時の地図からもそれは明らかである<sup>46)</sup>。この庭園に関しては、ジョージ 2 世ではなく、王妃キャロラインが主導したことが知られている。夫妻がこの敷地を獲得した直後の 1719 年、彼女は庭園会議 (garden 'conference') を開催し、ポーブ等を招いて庭園造りについて話し合っている。それが実行に移された結果、ジョージ 2 世の即位の頃にその骨組みが姿を現していたと考えられる。しかし、実際にこの庭園デザインを考案したのは、ポーブではなくブリッジマンであり、そこに 1730 年代の最初にケントによって Merlin's Cave と Hermitage が付け加えられたのである<sup>47)</sup>。このことは、18 世紀後半、ホレス・ウォルポール (Horace Walpole, 1717-1797) が、ブリッジマンの業績を振り返り、次のように記していることから明らかである。彼は、「いまだに高く切り揃えた生垣を持つ直線の道に拘っているが、それは主要な道のみにおいてである。それ以外は、ウィルダネスや不規則なオーク林によって多様化の様相を呈している。……彼の改革が確固たる地位を得るようになったので、彼はさらに思い切った試みに着手した。リッチモンドの Royal Garden では、耕作地や森林のような区画すら導入し始めた」と<sup>48)</sup>。

ここから、この庭園が、ポーブの庭園およびマーブル・ヒル・ハウスと同様なデザインコンセプトであったことがわかる。いまだ高く切り揃えた生垣や直線道路の存在が整形形式庭園の枠組みにあることを示しているが、そこに多くの不規則な要素がつけ加わっている。そのような要素が前二者の庭園よりも豊富であったこともこの引用およびロックのマップの両方から読み取ることができる。しかし、それ以上に重要なのが、ポーブの庭園等で採用されたように、ウィルダネスや円形競技場、マウント、そして、Merlin's Cave や Hermitage 等の建造物が古代ローマのイメージを包含していたことである。Diana Balmori は、この庭園を分析しながら、Cave や Hermitage はパラディアン・ヴィラのような古典主義的な建築物と不規則な風景式庭園の明らかな「衝突」を和らげる「仲介物」としての働きがあったと結論づけているが<sup>49)</sup>、むしろこれらは、古代ローマのエムブレムにつながるものと考えの方が的確であろう。それらは、ブリッジマンによる庭園全体の古典主義的イメージをさらに補強するものであったのであり、彼の庭園も古典的庭園 (antique garden) であったことはほぼ間違いない。そのことは、王妃キャロラインの信条である「Nature を助けるのであって、それを art の中に見失ってはいけない」('helping Nature and not losing it in art') を実践するものであった<sup>50)</sup>。ポーブの信念ともつながるこの言葉にアルカディア風景の創造を見ることができる。

1760 年、ジョージ 3 世が即位すると、このリッチモンドの改良に乗り出した。彼によって雇われたブラウンにより、リッチモンド・ロッジ周辺の庭園は全て取り壊され、芝地とところどころに置かれた樹木の塊からなる風景式庭園へと変貌を遂げた<sup>51)</sup>。ま



た、ロッジも18世紀終わりには撤去された。かつての庭園の北側はキュー植物園に吸収され、南側は現在、オールド・ディア・パークの茫々たる緑地が広がっている。

## おわりに

サドブルック・ハウスからポープのヴィラおよびマーブル・ヒル・ハウスを経て、リッチモンド・ロッジの風景まで、いずれも1720年代前後の約10年間という短い間の景観造りであったが、あえて時系列で概観してみると、そこに若干の発展が見受けられる。サドブルック・ハウスの庭園が整形式庭園であったのに対し、ポープの庭園には整形式庭園に不規則な要素が加わっている。その後、マーブル・ヒル・ハウスではヴィラおよび庭園の創り出す景観には中心に軸線を通ったシンメトリーな要素はあるが、不規則な要素も多々存在した。リッチモンド・ロッジに至っては、整形式庭園の部分は依然としてあるものの、全体的に不規則で自然的要素が顕著であることに気づく。

このように、同じ1720年前後のイングリッシュ・ガーデンと称されるものの中にも発展性を見ることができるが、それがまさに、18世紀半ばにかけてのブラウンらによる風景式庭園の流行の前段階となったと言い得る。最新の研究で David Jacques は、「いつ頃、……‘English’ style の庭園が ‘landscape gardens’ になったのか」について精査する必要があるとする問題提起をしている<sup>52)</sup>。これまで、イングリッシュ・ガーデンと風景式庭園を同一とする見方があったり、差異があるにせよその差異が曖昧であったりしたが、本稿で見てきたように同じイングリッシュ・ガーデンにおいても少しずつ差のあることを考慮に入れると、それらの発展性を通じて、18世紀半ばの風景式庭園に到達する流れが見えてくる。

しかし、本稿のテーマである1720年代のアルカディア風景の成立という観点で改めて見ると、テムズ川のこの流域にパラディアン・ヴィラの建物と庭園が創出した景観は、古典主義的理想を追求したものであったという点をあらためて強調しておきたい。パラディアン・ヴィラはその建物だけでなく、ランドスケープ造りにおいても古典主義の原則が適用されることが多かったのである。サドブルック・ハウスを除いて、ポープのヴィラからマーブル・ヒル・ハウス、リッチモンド・ロッジまで、その全てが、ヴィラと庭園の両方において、古代ローマのエンブレムが散りばめられた情景を模索していた。このアルカディア風景の創造の核はポープに尽きるであろう。彼はサドブルック・ハウスを除き、全てのヴィラおよび庭園造りに貢献している。ポープを軸にこのテムズ川流域で、古典的かつ哲学的見地に裏打ちされたアルカディア風景の創出が実践されたと見ることは可能であろう。このとき、ポープに古典主義的なインスピレーションを与えたのがテムズ川であったことは今さら指摘するまでもない。

注

- 1) Tom Brigden, *The Protected Vista: An Intellectual and Cultural History* (London and New York: Routledge, 2019) 49, 67–71.
- 2) The British Museum, “A View from Richmond Hill up the River,” 1749.
- 3) Kim Wilkie for The Thames Landscape Steering Group, “The Thames Landscape Strategy Hampton to Kew,” June 1994.
- 4) Historic England のホームページを参照。 <https://historicengland.org.uk>
- 5) 芝奈穂「19世紀初頭リージェンツ・パークにおけるヴィラ—ジョージ王朝の郊外ヴィラの伝統の系譜において」『英米文化』51 (2021): 55–78.
- 6) John Archer, *Architecture and Suburbia: From English Villa to American Dream House, 1690–2000* (Minneapolis and London: Minnesota UP, 2005) 46, 68.
- 7) Ibid., 84.
- 8) Mavis Batey, Henrietta Buttery, David Lambert and Kim Wilkie, *Arcadian Thames: The River Landscape from Hampton to Kew* (London: Barn Elms, 1994) 14.
- 9) May Woods, *Visions of Arcadia: European Gardens from Renaissance to Rococo* (London: Aurum Press Ltd, 1996).
- 10) Gervase Jackson-Stops, *An English Arcadia: Designs for Gardens and Garden Buildings in the Care of National Trust, 1600–1990* (London: The National Trust, 1992).
- 11) Adam Nicolson, *Arcadia: The Dream of Perfection in Renaissance England* (London: Harper Perennial, 2009).
- 12) Allan R. Ruff, *Arcadian Visions: Pastoral Influences on Poetry, Painting and the Design of Landscape* (Oxford: Windgather Press, 2015).
- 13) Tim Richardson, *The Arcadian Friends: Inventing the English Landscape Garden* (London: Bantam Press, 2008).
- 14) Batey et al., *Arcadian Thames*.
- 15) Batey, “The Pleasures of the Imagination: Joseph Addison’s Influence on Early Landscape Gardens,” *Garden History* 33: 2 (2005): 189–209.
- 16) Batey et al., *Arcadian Thames*, 15.
- 17) John Rocque, *An Exact Survey of the City’s of London, Westminster (1741–5)*.
- 18) John Harris, “A Tour of London’s Gardens with John Rocque,” *London’s Pride: The Glorious History of the Capital’s Gardens*, ed. Mireille Galinou (London: Anaya Publishers Ltd, 1990) 102–21.
- 19) James Gibbs, *A Book of Architecture, Containing Designs of Buildings and Ornaments* (London, 1728) plate 40. なお、当該ヴィラの概要については以下を参照。Terry Friedman, *James Gibbs* (New Haven: Yale UP, 1984) 133–37; Caroline Knight, *London’s Country Houses* (Andover: Phillimore, 2009) 233–35; Archer, *Architecture and Suburbia*, 53–55.
- 20) このレイアウトの詳細については、H. M. Cundall, *Sudbrook and Its Occupants* (London: Adam and Charles Black, 1912) 24–25.
- 21) John Phibbs, “The Persistence of Older Traditions in Eighteenth-Century Gardening,” *Garden History* 37: 2 (2009): 175–76.
- 22) The National Archives, “Plan of Sudbrook Park in Petersham and Kingston,” 1831. MPE 1/982.
- 23) Batey et al., *Arcadian Thames*, 84.
- 24) Brigden, *The Protected Vista*, 29.

- 25) Batey et al., *Arcadian Thames*, 65.
- 26) Alexander Pope, *The Guardian* (1713), as cited by John Dixon Hunt and Peter Willis eds., *The Genius of the Place: The English Landscape Design 1620–1820* (London: MIT Press, 1988) 204.
- 27) The British Museum, “A View of the Celebrated Mr. Pope’s House,” 1762–1793 (c.).
- 28) Knight, *London’s Country Houses*, 291.
- 29) John Serle, *A Plan of Mr Pope’s Garden as It Was Left at His Death with a Plan and Perspective View of the Grotto* (London: R. Dodsley, 1745).
- 30) Emily Parker, “‘The Taste of the Ancients’: The Garden at Marble Hill,” *Garden History* 46: 2 (2018): 146.
- 31) 安西信一『イギリス風景式庭園の美学——〈開かれた庭〉のパラドックス』増補新装版（東京：東京大学出版会，2020）137–39。また、Parker, “The Taste of the Ancients,” 140も参照。
- 32) Batey et al., *Arcadian Thames*, 68.
- 33) Capability Brown とその風景式庭園については、たとえば、John Phibbs, *Capability Brown: Designing the English Landscape* (New York: Rizzoli, 2016) を参照。
- 34) 後のヴィラの所有者が、ポープのヴィラと庭園を見にくる多くの旅行者たちに嫌気がさし、19世紀の最初に庭園を破壊してしまった。現在、ヴィラも庭園も消滅したが、地下のグロットだけが奇跡的に現存している。
- 35) Colen Campbell, *Vitruvius Britannicus, or The British Architect; Containing the Plans, Elevations, and Sections of the Regular Buildings, Both Public and Private in Great Britain*, vol. 3 (London, 1725) plate 93. なお、当該ヴィラの概要については、Knight, *London’s Country Houses*, 284–86 を参照。
- 36) The British Museum, “A View of the Countess of Suffolks House near Twickenham,” 1749. 楕円形の芝地は、残念ながらこの風景画では角度的によく見えない。また、ロックの地図では、当該ヴィラの敷地はその区画が記してあるだけで、所有者の名前も詳細なデザインも明記されていない。後述する Emily Parker も指摘するように、前者の風景画は当時の庭園を描いた唯一のものである。リチャード・ウィルソン（Richard Wilson）による後の風景画（c. 1762）からは庭園の様子は窺えない。
- 37) Norfolk Record Office, ‘Plans of Marble Hill, Twickenham, Middlesex, belonging to Henrietta Howard,’ MC184/10/1-3.
- 38) Parker, “The Taste of the Ancients,” 128–53.
- 39) Batey, *Alexander Pope: The Poet and the Landscape* (London: Barn Elms, 1999) 82.
- 40) Parker, “The Taste of the Ancients,” 140–41.
- 41) Ibid., 149.
- 42) Hugh Prince, “Art and Agrarian Change, 1710–1815,” in Denis Cosgrove and Stephen Daniels, eds., *The Iconography of Landscape: Essays on the Symbolic Representation, Design and Use of Past Environments* (Cambridge: Cambridge UP, 1988) 105; David H. Solkin, *Richard Wilson: The Landscape of Reaction* (London: Tate Gallery, 1982) 214.
- 43) The British Museum, “A View of Richmond Palace, from the Walled Garden,” Crace 1878 (XXXVI. 60).
- 44) Yale Center for British Art, John Rocque, “An Exact Plan of the Royal Palace Gardens and Park at Richmond,” 1754.
- 45) John Cloake, *Palaces and Parks of Richmond and Kew*, vol. 2 (Frome and London: Phillimore, 1996) 35.

- 46) The National Archives, Work 32/282およびMR 1/696. 特に後者は1727年より前に作製されたと考えられる。
- 47) Cloake, *Palaces and Parks of Richmond and Kew*, 36–42.
- 48) Horace Walpole, quoted in “Historical Account of Kew to 1841,” *Bulletin of Miscellaneous Information (Royal Botanic Gardens, Kew)*, 60 (1891): 283–84.
- 49) Diana Balmori, “Architecture, Landscape and the Intermediate Structure: Eighteenth-Century Experiments in Mediation,” *Journal of the Society of Architectural Historians* 50: 1 (1991): 48–52.
- 50) Egmont Diary (1743), Historic MSS Commission, II, 138, quoted in Batey, “The Pleasures of the Imagination,” 206.
- 51) Cloake, *Palaces and Parks of Richmond and Kew*, 45–46. ブラウンによる改良設計図については、The National Archives, Work 32/96を参照。
- 52) David Jacques, “William Kent’s ‘Notion of Gardening’: The Context, The Practice and the Posthumous Claims,” *Garden History* 44: 1 (2016): 49.